

福岡市

野多目古屋敷遺跡

～住宅・都市整備公団野多目団地建設に伴う文化財調査～

福岡市埋蔵文化財調査報告書第103集

1984

福岡市教育委員会

福岡市

野多目古屋敷遺跡

～住宅・都市整備公団野多目団地建設に伴う文化財調査～

福岡市埋蔵文化財調査報告書第103集

1984

8/35

福岡市教育委員会

序 文

住宅・都市整備公団は、福岡市南区野多目に大橋南グリーンハイツの開発事業を計画し、福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では、昭和57年2月から建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

調査によって条里制と関連する溝など各時代の遺構と遺物が検出されています。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるよう広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで、住宅・都市整備公団、指導員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津 茂美

例言

1. 本報告書は1982年2月1日～3月25日に発掘調査を実施した住宅・都市整備公団野多目団地(仮称)の開発に伴う調査報告である。
2. 遺構、遺物の実測、製図及び写真撮影は松村がこれにあたった。
3. 遺物の接合、復元には文化課有田事務所の協力を得た。
4. 本書に使用した航空写真は福岡市埋蔵文化財センター所蔵の写真を使用した。
5. 本書の執筆、編集は松村が行った。

本文目次

序

I	はじめに	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	遺跡の立地と周辺の遺跡	3
III	調査の記録	
1.	調査の概要	7
2.	第1地点の調査	9
(1)	1号溝	9
(2)	2号溝	9
(3)	堰状遺構	11
(4)	杭列	11
3.	第2地点の調査	
(1)	1号溝	17
(2)	2号溝	19
IV	小結	23

挿図目次

第1図	野多目古屋敷遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	野多目古屋敷位置図 (1/2,500)	4
第3図	野多目古屋敷遺跡周辺地形測量及び調査区配置図 (1/1,000)	5
第4図	I区1・2号溝全体図 (1/250)	6
第5図	I区1・2号溝土層図 (1/50)	7
第6図	I区第1～3号杭列実測図 (1/100)	8
第7図	I区2号溝出土土器実測図(1)	10
第8図	I区2号溝出土土器実測図(2)	12
第9図	I区2号溝出土土器実測図(3)	13
第10図	I区2号溝、杭列出土遺物実測図	14
第11図	I区第1杭列出土瓦拓影図	16
第12図	II区1・2号溝実測図 (1/200)	18

第13図	II区1・2号溝土層図	19
第14図	II区1・2号溝出土土器実測図	20
第15図	II区2号溝出土土器実測図	21

図 版 目 次

図版1	航空写真
図版2	(上) I区全景 (下) I区1号溝
図版3	(上) I区1号溝全景(南より) (下) I区1・2号溝土層
図版4	(上) I区1号溝土層 (下) 堰状遺構(東より)
図版5	(上) 堰状遺構(北より) (下) 堰状遺構(北より)
図版6	(上) 1号杭列(東より) (下) 1号杭列(西より)
図版7	(上) II区1・2号溝(北より) (下) II区1号溝土層
図版8	出土土器(縄文式土器 土師器)
図版9	出土土器(土師器 須恵器)
図版10	出土遺物(須恵器 布目瓦)
図版11	出土陶磁器(青磁 唐津 伊万里)

I はじめに

1. 調査に至る経過

1981（昭56）年4月 住宅・都市整備公団より、福岡市南区大字野多目に野多目団地（仮称）の建設に伴い、文化課に対し、埋蔵文化財の有無について事前の確認がなされた。申請地周辺は遺跡の密集する箇所にあたり、これまで調査された遺跡でも野多目前田遺跡、野多目拈渡遺跡がある。しかし、1980年発行の「福岡市文化財分布地図中部・南部」では申請地は登録されておらず、いわゆる「周知の遺跡」ではなく、那珂川の氾濫原と推定されていた。申請地が22.881㎡と広大であることから、文化課では早速4月30日より2日間試掘調査を実施した。試掘調査では10数本のトレンチを掘開した。大部分は那珂川の氾濫源で遺構は存在しなかったが、現在の集落の台地縁に2ヶ所約1,000㎡に遺構溝の存在することが判明し、本調査が必要の旨、公団に連絡をとった。文化課では多くの発掘調査を実施しており、早急に調査を実施するのは困難であった。その後、文化課、公団と協議を進め、翌57年2月1日から2ヶ月の調査期間で発掘調査することとなった。

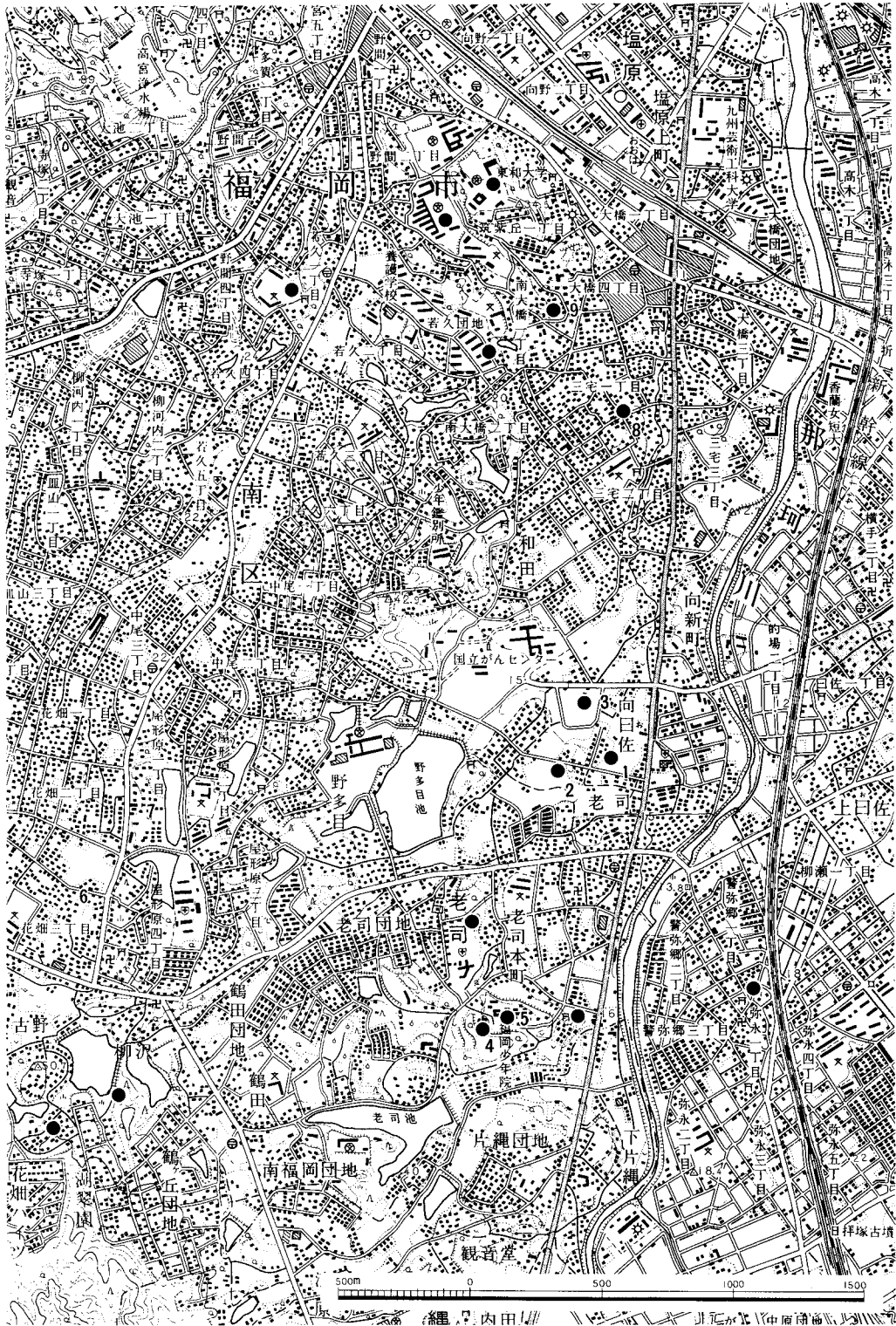
2. 調査の組織

調査委託 住宅・都市整備公団
 調査主体 福岡市教育委員会文化体文化課埋蔵文化財第1係
 事務担当 柳田純孝（係長） 岡嶋洋一
 発掘担当 松村道博

発掘調査に際しては河村順二・辺保耕一（住宅・都市整備公団）、山下雅博（戸田建設株式会社）の各氏には種々御迷惑をおかけした。また出土陶磁器について大橋康二氏（九州陶磁文化館）の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

また、発掘・整理作業にあたっては以下の人々の協力を得た。

国武ナナエ 稗島幸代 熊野博子 村島迪子 春山紀久子 馬場佐代子 中島すみえ 原幸子
 石橋信子 森山早苗 古賀博子 山村スミ子 安高久子 永松トミ子 永松伊都子 砥綿チ江子
 榎藤利雄 津村武光 大部茂久 徳永静雄 三浦力 安武秀喜 奥野雅則 安部精一 烏山信秀
 田尻主範 須崎紳一郎 内尾トミ子 永井和子 坂田まさ子 友田好子 山下仁美
 谷沢仁 明野隆



第1図 野多目古屋敷遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

野多目古屋敷遺跡は福岡市南区大字野多目にあたり、福岡平野の南西部に位置し、標高10～13mを測る河岸段丘～沖積地にある。遺跡の東約500mには福岡平野を潤す那珂川が北流する。西側には東油山山塊から北へ派生する低丘陵があり、多くの遺跡を載せている。

この地域を歴史的に概観すると旧石器時代には明確な包含層は確認されていない。しかし、ナイフ形石器などが野多目拈渡遺跡、臼佐遺跡群で採集され、その痕跡が認められる。

縄文時代の遺物は古墳の墳丘から採集される程度で数少なかったが、柏原遺跡群で調査が実施されている。標高50mの山麓裾部で、縄文時代早期および、晩期の集落が検出されている。さらには野多目拈渡遺跡では後期の貯蔵穴50基、溝状遺構が確認されている。

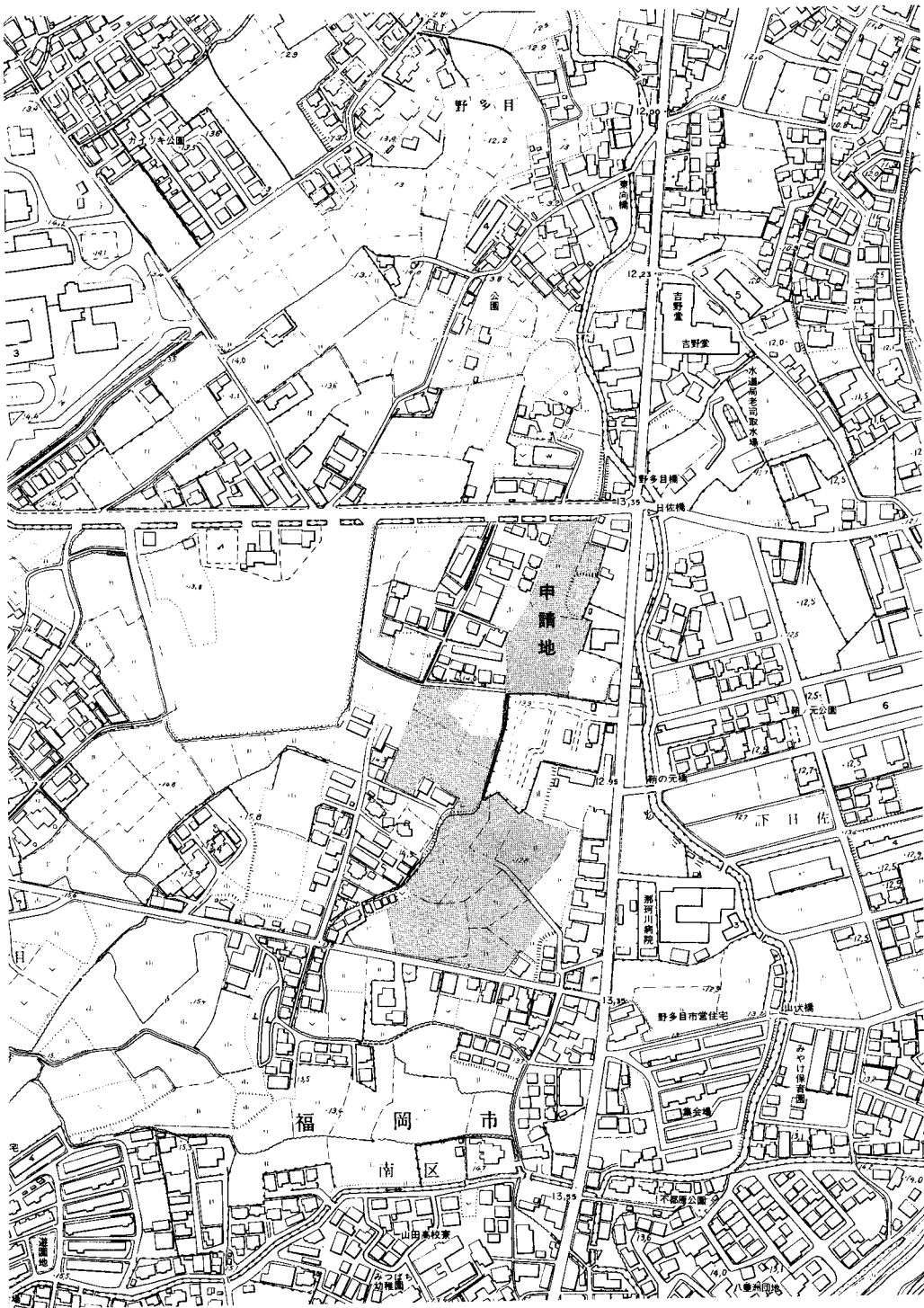
旧石器・縄文時代の遺跡は極めて少いが、弥生時代になると、多くの遺跡が占地する。那珂川の東岸では須玖丘陵に中期甕棺に代表される須玖遺跡群、あるいは後～終末の臼佐原遺跡がある。西岸部には前期の貯蔵穴、中期の円形住居址が前記の野多目拈渡遺跡で検出され、野多目前田遺跡の北では夜臼・板付I式の溝を調査している。墳墓群として、若久団地遺跡から箱式石棺・甕棺が出土し、岩野遺跡では細形銅矛を出土する。

古墳時代では竪穴系横穴式石室として知られる老司古墳がある。舶載・倣製鏡、埴輪、装身具などを出土している。他に卯内尺古墳、老松神社古墳群、さらに南の油山山陵には柏原古墳群、大谷古墳群等の群集墳が西油山まで数百基が分布する。集落址の調査例には野多目拈渡遺跡が知られるが、遺構面の確認だけにとどまり、竪穴内の調査は実施されていない。

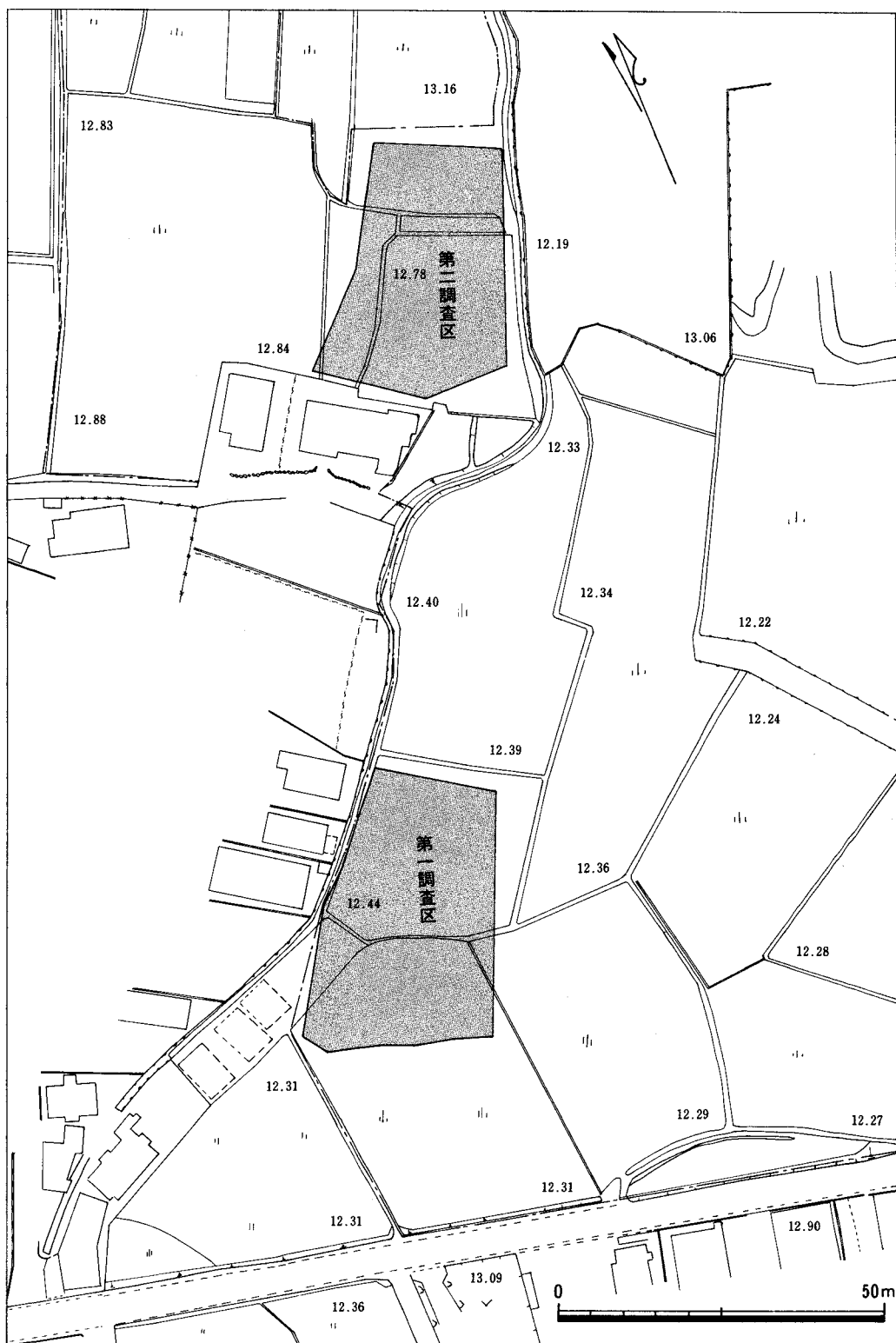
奈良・平安時代では筑紫官家のものと推定される礎石群や三宅廃寺、三宅瓦窯址、岩野瓦窯址等の官衙に関連する遺跡群が北約1mの位置にある。南西1kmには老司式瓦で知られる老司瓦窯址がある。また拈渡遺跡では掘立柱建物24棟が確認されている。四ノ坪、八ノ坪等の条里を想定できる小字名も遺存している。

中世では柏原遺跡では溝で区画した居館址や、水田遺構が知られる。本遺跡の周辺地域からも輸入陶磁器が採集されるが、近世も含めて調査が実施されていないので、現在のところ詳細は明らかではない。

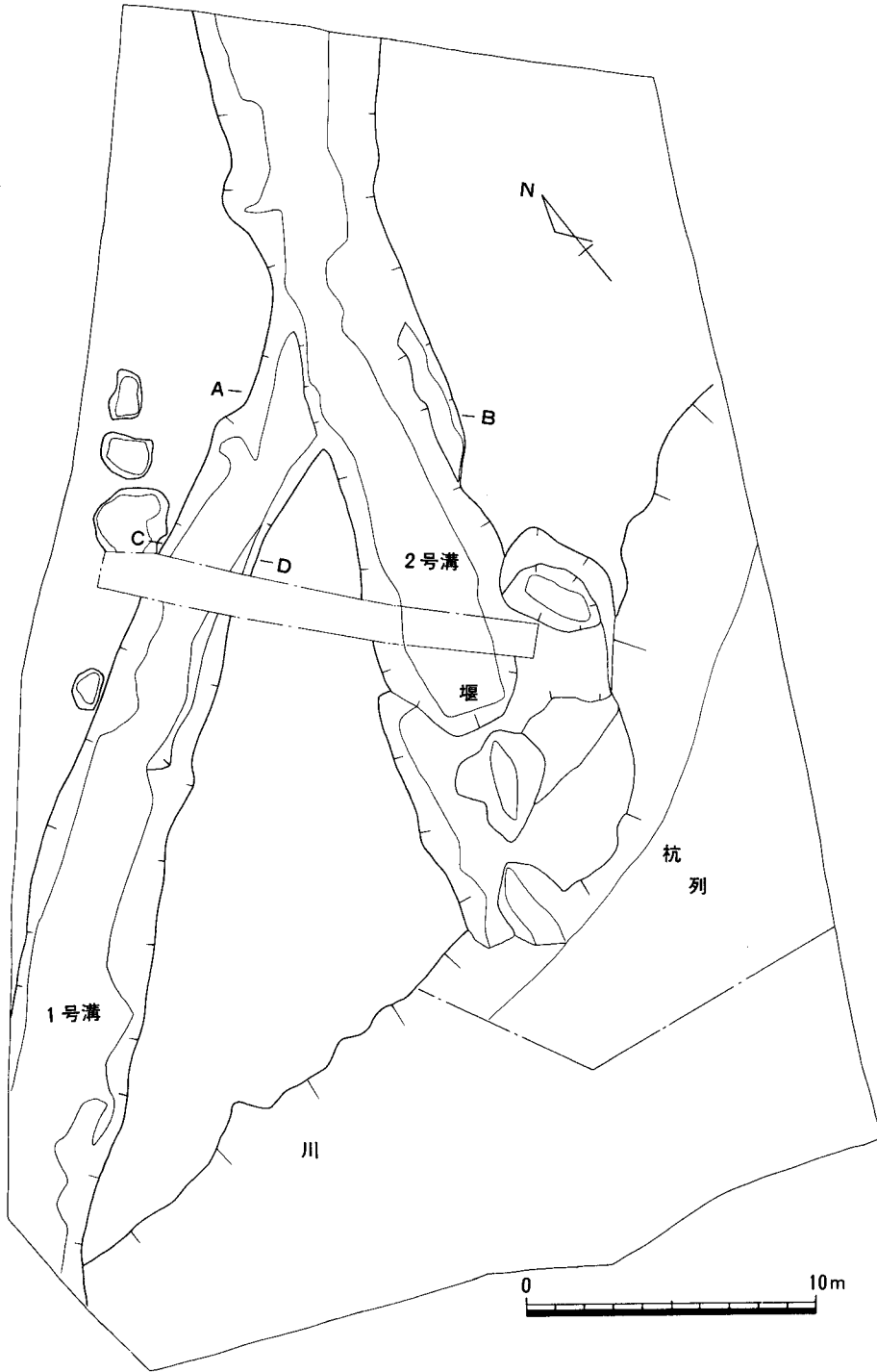
-
1. 野多目古屋敷遺跡 2. 野多目拈渡遺跡 3. 野多目前田遺跡 4. 老司古墳
5. 卯内尺古墳 6. 花畑B遺跡群 7. 花畑C遺跡群 8. 三宅瓦窯址 9. 大橋A遺跡



第2図 野多目古屋敷遺跡位置図 (1/5,000)



第3図 野多目古屋敷遺跡周辺地形測量及び調査区配置図 (1/1,000) (数字は標高を示す)



第4図 1区1・2号溝全体図 (1/250)

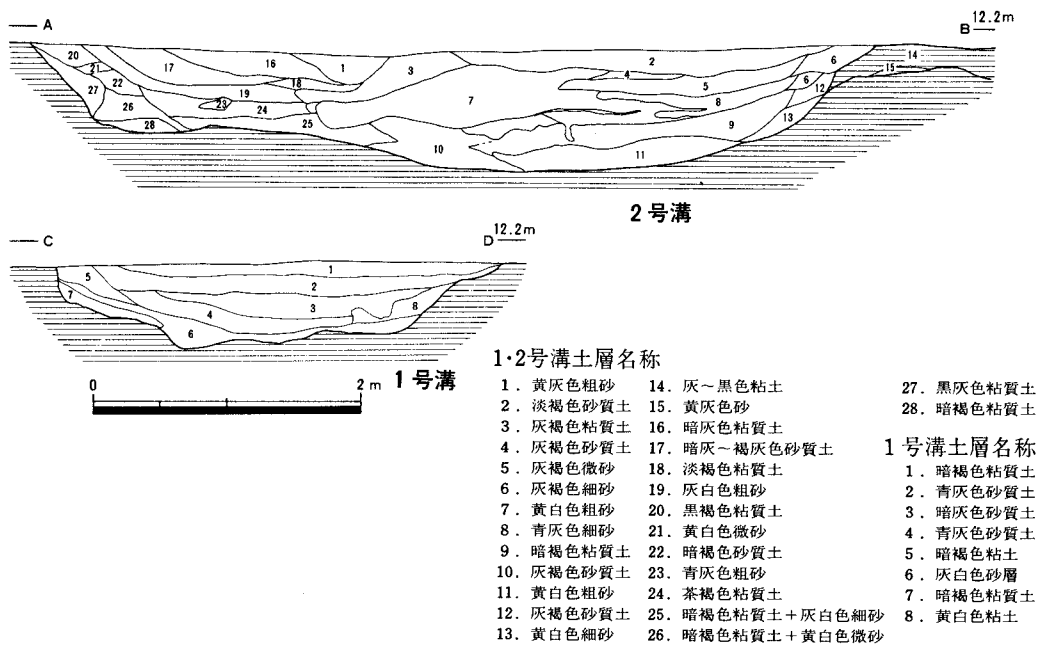
III 調査の記録

1. 調査の概要

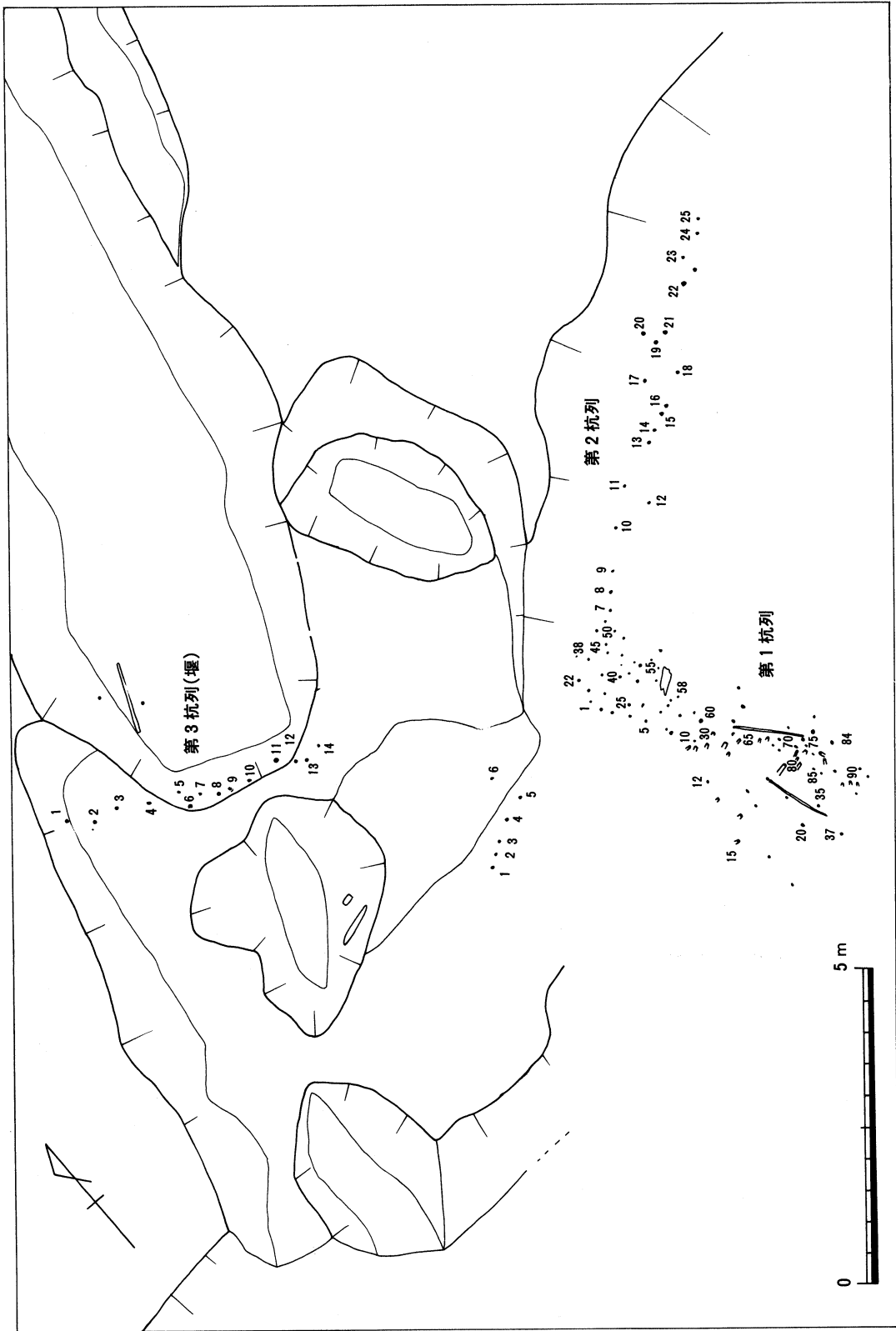
野多目古屋敷遺跡は調査地点が2ヶ所に分れていたため、南側を第1調査区、北側を第2調査区とした。遺跡の名称は小字名を用いて「野多目古屋敷遺跡」と呼称する。調査地点は洪積台地の縁にあたり標高12m前後を測る沖積地で水田として利用されている。広い沖積地を有する那珂川から西約600mの位置にあたり、申請地の大部分はその氾濫源にあたる。調査は第1調査区から開始したが、その時には試掘調査の結果を踏まえて、調査範囲以外はすでに造成工事が着手されており、調査区の拡張は不可能であった。

第1調査区

土層は耕作土・床土の下はシルト質砂層で溝はその面より掘り込まれている。西側の現在の集落に近い5~10m程度はシルト層は薄く直ぐに八女粘土層となる。この八女粘土層は1号溝までで、2号溝では現われない。1号溝は幅約3.0~4.5m、深さ0.5~0.7mを測り北東から南西方向へと延びる。出土遺物は須恵器、土師器の細片だけである。2号溝は北から南へ延びる。幅5~6m、深さ約1mを測る。南端には溝を横断する堰状遺構があり、丸木杭を一列にめぐ



第5図 I区1・2号溝土層図(1/50)



第6图 I区第1~3杭列实测图(1/100)

らす。溝からは古墳時代の遺物がかなり多く出土しているが、南の堰状遺構からは古代の瓦類も出土しており、溝もこの時期のものと考えられる。1号溝は2号溝の中央部で交わっているが、本来一連のものであろう。2号溝の南は氾濫原(旧河川)と考えられ、幾層もの砂層で埋まっているが、2号溝が活用されていた時には、水が流下し、取水口として利用されていたものである。

第2調査区

第1調査区の北約100mに位置する。水田化された時に削平を受けており、検出された遺構は南北方向の溝(奈良)とそれを斜めに横切る近世溝の2本だけである。1号溝は幅3.5~4.2m、深さ1~1.5mの断面「U」字型の溝で、ほぼ直線的に延びる。第2号溝は幅4~8mの断面皿状の浅い溝である。第1号溝と接する地点から西へ折れる。出土遺物は16世紀頃より、18世紀前半頃の陶磁器を含む。

2. 第I地点の調査

(1) 1号溝(第4図)

調査区の西側に検出された溝で、台地に併行する。南西から北東へ延び、2号溝へと接続する。南西部分はさらに調査区域外へ広がっている。

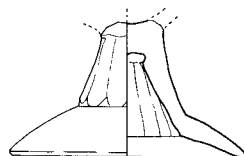
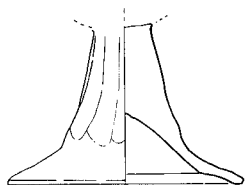
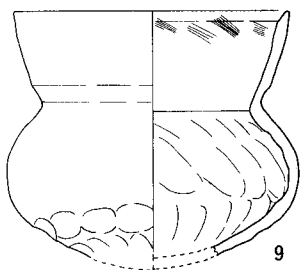
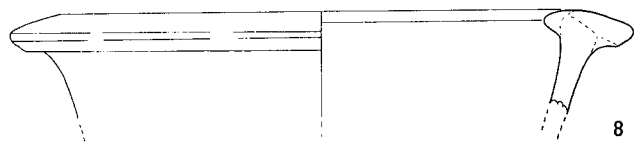
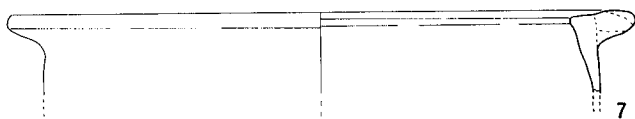
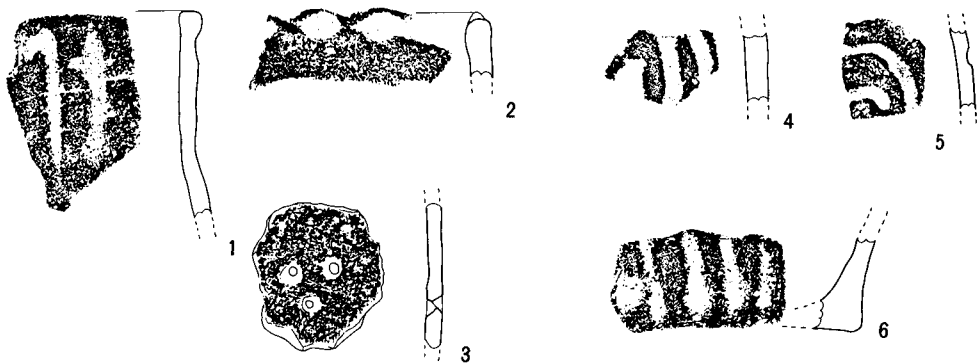
規模は現存長33.5m、幅3.0~3.4mを測る。断面形は深皿状を呈する。溝の土層堆積は①の最上層が暗褐色粘質土である。溝内の水が滞留している状態であった事を示す。②~④は青灰白色の細砂層で水の流れをうかがわせる。溝の縁部に堆積する⑤⑦⑧は地山の八女粘土を混入する層で、壁面の崩落状態を示す。壁面は東側で狭長な平坦面を形成する部分や、壁面が急俊になる所もあり全体に様な状態ではない。床面の標高は北東部で11.37m、中央部で11.35m、南西部で11.44mを測り、床面の高低差から考えると南西から北東に流れ、2号溝に流れ込んでいたものと推察できる。ただ溝の一部の調査であるので、明確な解答は得られないが、単独の溝であると考え、途中で消滅するのは理解に苦しむ。1号溝からは須恵器、土師器の細片しか出土していないので、2号溝の出土遺物で年代を決定する他はない。

(2) 2号溝(第4図)

調査区のほぼ中央部に検出された幅の広い溝である。遺構確認面の埋土は1号溝と異なり褐色砂質土に被われていた。溝の方向はほぼ南北方向に直線的に延び、調査区外へと続く。試掘調査で調査範囲が限定され、調査区以外はすでに工事が実施されていたので、この溝が北側へどのように延びていたか確認することは出来なかった。

溝の規模は現存長約31m、幅4.0~6.2mを測る。断面の形態は逆台形を呈する。溝の堆積はほとんどが細砂~粗砂層である。①は当初溝であろうと考えていたもので、幅0.7m、深さ0.05~0.20mの自然の流路である。2号溝の北中央部から1号と2号溝の間へ延び、消滅する。こ

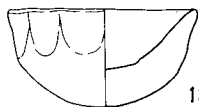
10



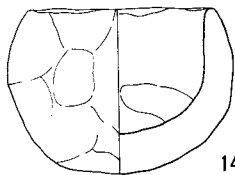
9

10

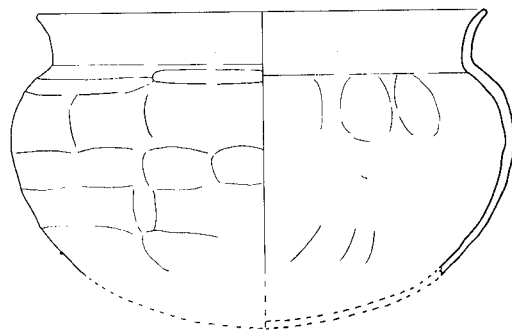
11



13



14



12



第7图 I区2号沟出土土器实测图(1)

の砂層からは中世の土師質土器の皿（第9図）が出土しており、15世紀頃の流路と考えられる。②～⑩は粗砂～細砂層で⑧⑨⑪は粘質土、微砂質土との互層となる。2号溝は微砂層に掘り込まれているため、溝の形態、床面の状態も一様ではない。東側では肩部に平坦面を形成し、床の幅が狭くなる。床面の標高は北端で10.75m、中央部で11.1m、南端で10.77mを測り、中央部分が高く、両端が低くなる。溝の一部分の調査であるので、床面の高低差だけでは、どの方向に水が流れていたか判断に迷うが、護岸の杭列や、溝を横切る堰などの状況から南から北へ流れていたと考えられる。

(3) 堰状遺構（第6図）

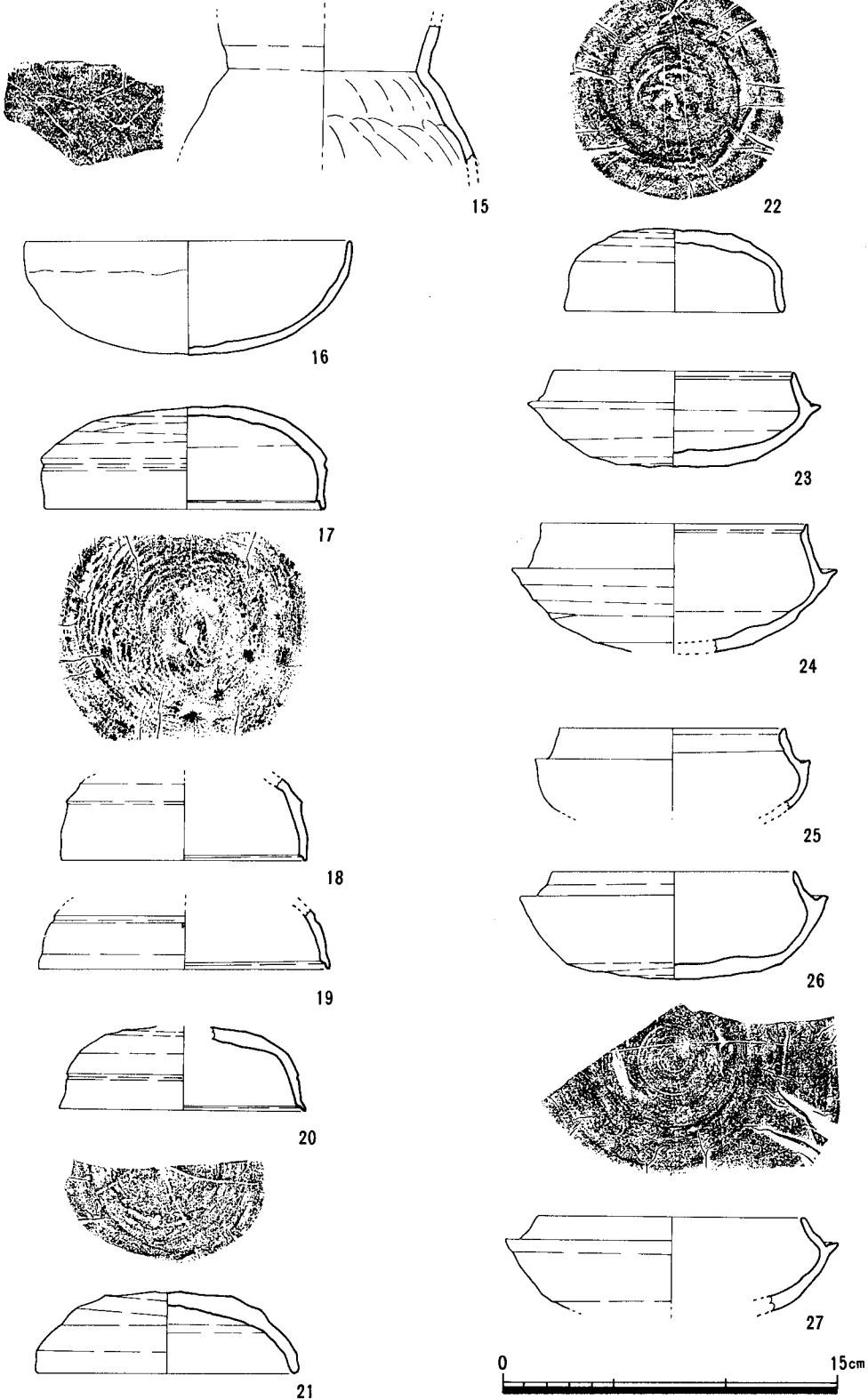
堰は溝の南端から4m北に寄った所にある。溝の南端は床面が一段高く堤防状になり、溝を横切る状態で堰を設け、径5～10cmの丸木杭を14本打ち込んでいる。立杭以外に横木等は検出されなかった。杭の保存状態は悪く、ほとんどが腐朽し、その痕跡をとどめる位である。杭は土手の北端にそって直線的に打たれ、幾重にも重ることもなく簡便なものである。保存状態が悪いため杭の遺存が少なかったのか、あるいは元来少量の杭しか打っていなかったか明らかではないが、発掘した状態が本来のものであれば、堰以外の機能も検討しなくては行けない。堰部の幅は1m前後と考えられるが、現状では幅が狭く0.4～0.8m、高さ0.2～0.3mである。堰の南側には3.0×3.8m、深さ0.35mの不整形円形の土壙がある。さらに東側には、大型の土壙をもつ。規模は4.5×2.7m、深さ1.0mで長楕円形の平面形である。この土壙は水田へ水を流す際に一度水を滞留させ、冷水を温める施設と考えられる。

(4) 杭列（第6図）

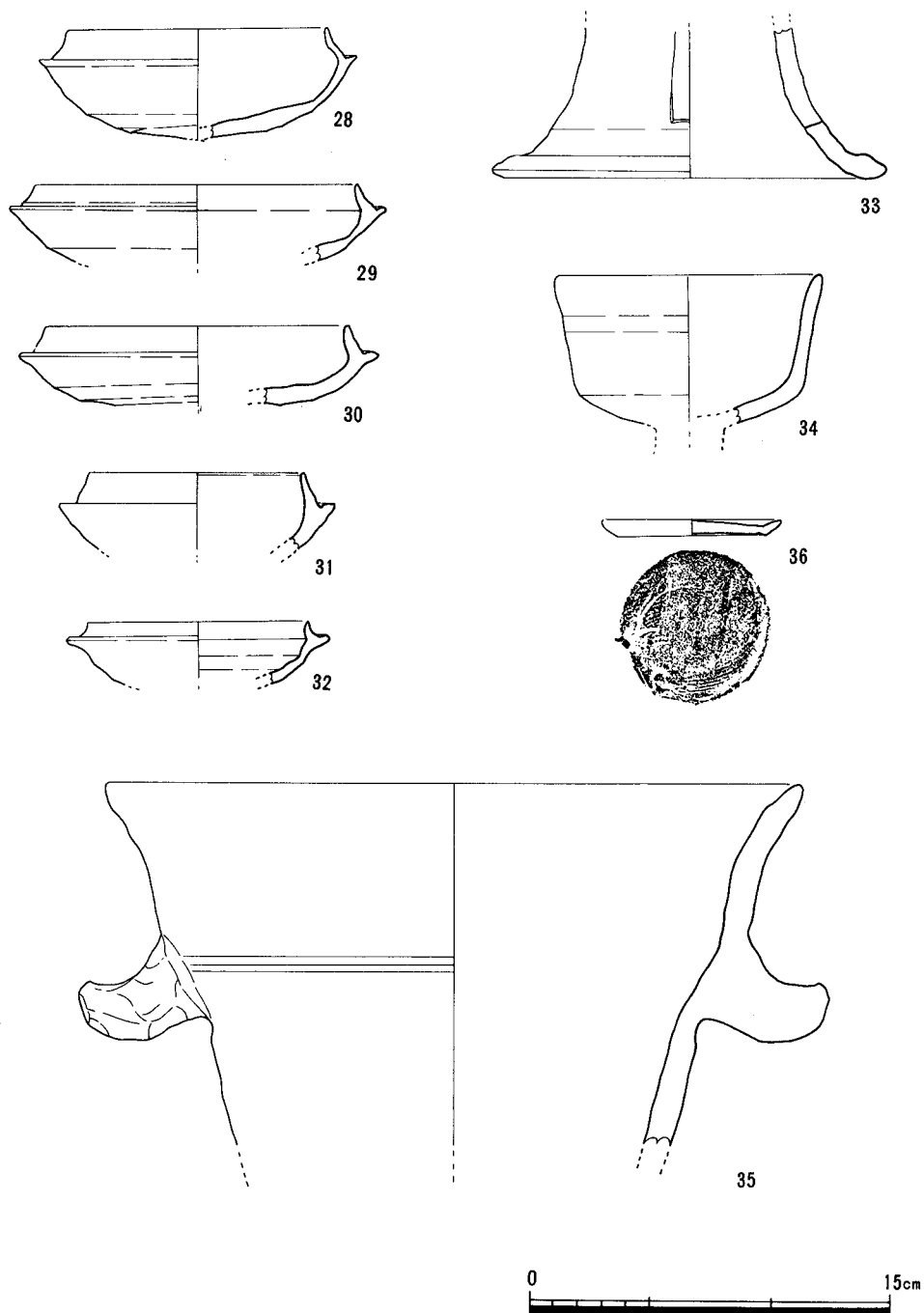
調査区の南側は氾濫原とされ、調査区域外になっていたので、2号溝の先端部に限り調査を実施した。杭列は護岸の第2杭列とそれと直行する第1杭列がある。第2杭列の基盤層は細砂質のシルト層で、その下は礫層となる。杭はこのシルト層に打ち込まれている。岸の上面から1.2～1.3m下に位置し、不均等な間隔に打つ。現存するものだけで長さ7mの範囲に設ける。杭は径4～6cmで先端部だけを鋭くし、他は未加工な状態を示す。長さは28～48cmで、地中に打ち込まれている長さは比較的短い。第2杭列は幅2.5m、長さ5mにわたり幾重にも打ち込まれている。先端部は礫層まで達しているので遺存状態は必ずしも良好ではないが全長が1mを越す杭もある。平均的には50～60cmを測る。杭の径は第2杭列よりも一回り大きな丸木を使用し、径6～7cmである。丸木材以外に半截したものや、割板材も少数混在する。杭列はさらに東側へ続くと考えられる。この杭列は2号溝の東岸の延長線上にあり、それに付属すると考えられる。

I区出土遺物（第7～11図）

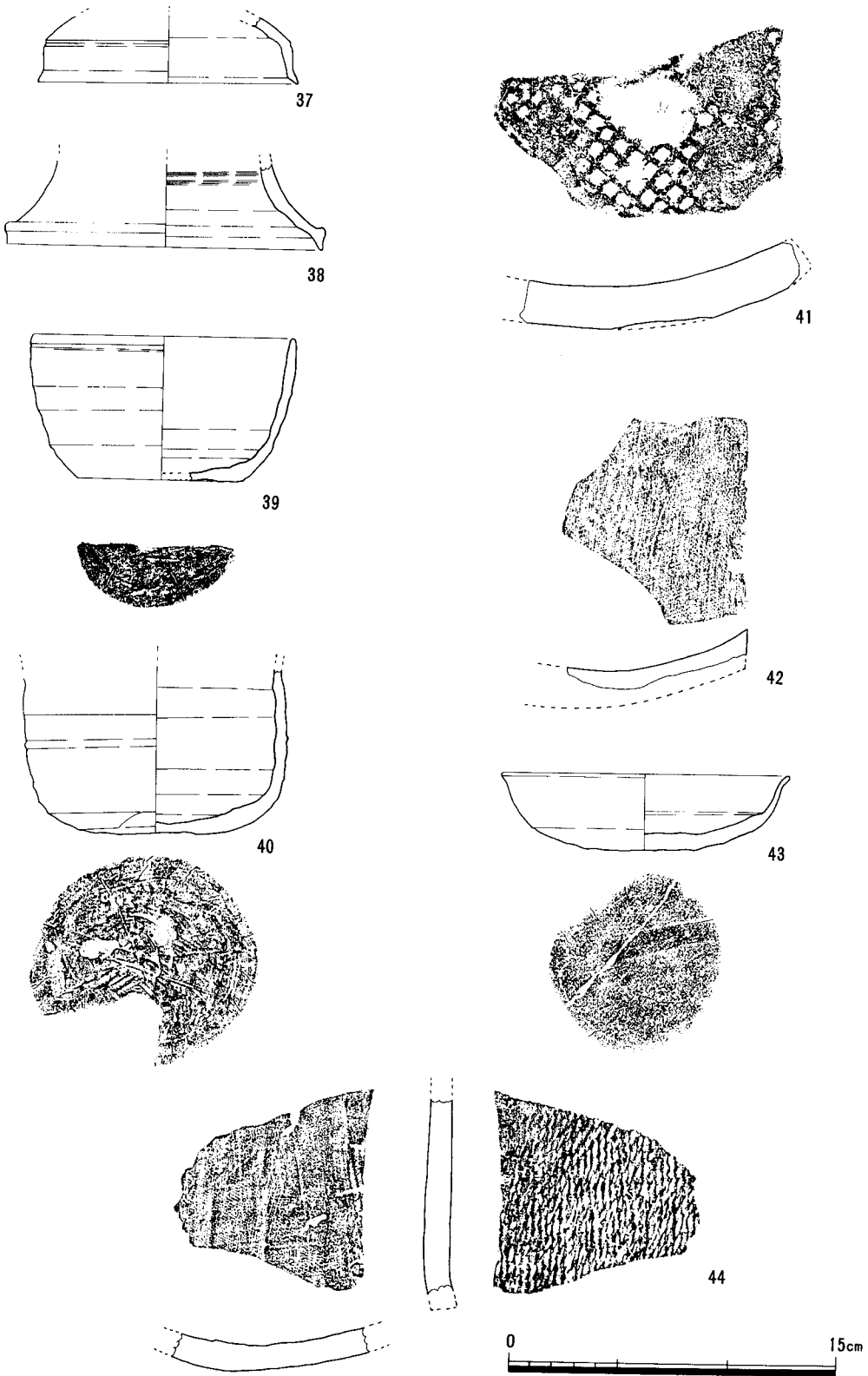
1～6は縄文式土器である。1～4、6は色調が赤褐色～茶褐色で胎土に滑石を含む一群で、凹線文を描く阿高系の土器である。3は無文で焼成後の穿孔が3個認められ、補修孔と考えら



第8图 I区2号沟出土土器实测图(2)



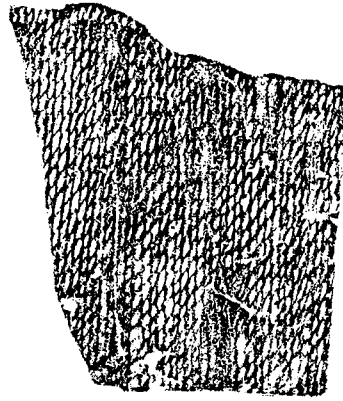
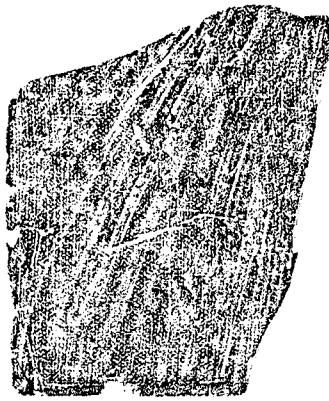
第9图 I区2号沟出土土器实测图(3)



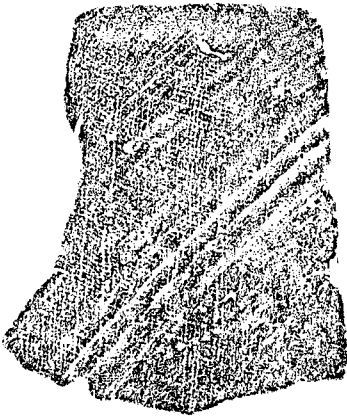
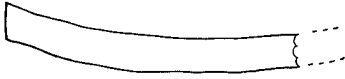
第10图 I区2号溝, 杭列出土遺物実測図

れる。5は色調が茶～黒褐色で胎土には砂粒を少し含むが良好である。器壁が薄く文様は明瞭である。7, 8は弥生式土器の口縁部破片である。7は甕で中期中葉である。色調は淡褐色で胎土に石英粒を多く含む粗悪である。全体に磨耗が著しい。9～16は土師器の一群である。9は小型丸底壺である。色調は淡褐色を呈する。胴部は扁平な球状を示し、内弯気味に外へ開き口縁部となる。口縁端部は尖る。胴部内面はヘラ削り、口縁部は細い刷毛の後ヨコナデを施す。外面もナデ調整である。10・11は高杯脚部である。短い筒部から内弯する裾部となる。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。胎土に少量の小石を含む。脚部の一部を欠失し、全体に歪みをもつ。13・14は小型の手捏土器である。13は口径4.5cm, 器高2.5cmの完形品で丸い底から胴部中央部で屈曲して外へ開く。外面には指の調整痕が残る。14も完形品で口径5.0cm, 器高4.4cmを測る。最大径は胴部中位にあり、口縁部は少しすぼむ。内外面に指跡が遺存している。12は短頸壺で底部を欠失する。肩部に最大径をもち、丸底になる。頸部は短く外反する。内外面共にヘラ削り、口縁部はヨコナデを施す。15は頸～胴部にかけての破片である。胎土に小石を混じ、色調は淡褐色。内面はヘラケズリ、外面はナデ調整を施す。胴部外面に篋描の弧文を刻む。16は完形品の碗である。口径15.0cm, 器高5.1cm。丸い底部から内弯して口縁部へ至る。全体に磨耗が著しく、調整は不明。12・16は床面。他は上層出土。

17～34は須恵器である。17～20は杯蓋で、口縁部内面に浅い段を有する一群である。17は体部と天井部の境に沈線をめぐらす。口縁部には段を有し、端部を丸く収める。天井部は回転ヘラケズリで、他はナデ調整を行う。内底面にはタタキ痕が遺存する。19・20も天井部と体部の境に浅い沈線をもつ。口唇部は直線的な体部から外へ開き、丸く収める。18は境に稜を有する。いずれも胎土、焼成は良好で、色調は青灰色ないし黒灰色を呈する。23～32は杯で各種のものを含む。口縁部は23が直線的に内傾し、24・25は内傾する口縁部が直線的に立ち上がる。23～25は口縁部内側に段を有する一群である。底部はヘラケズリ、他はナデ調整を施す。25は受部のかえりが短い。口縁部内側の段も不明瞭で低い。27・28は器壁が薄く、比較的長い口縁部となる。27の口縁端部は丸く収まり、底部はヘラケズリ。28もほぼ同じであるが、口縁端部が垂直に立ち上がる。底部内面にタタキ痕が不明瞭に遺存する。29～31は器壁が厚く、短い口縁部がつく。いずれも小破片である。口縁端部は丸く直線的な傾斜を示す。底部にはヘラケズリを施す。32は受部から内傾しながら外反する短い口縁部で端部は尖る。33は高杯の脚部である。透しを4ヶ所に有し、ラッパ状に開く裾部から内傾し筒部となる。裾端部は尖り気味になる。35は甌の口縁から胴部にかけての破片である。復元口径29cmを測る。胎土に小石粒を多く含む。色調は黒褐色で、焼成良好。口縁下7cmに貼付の把手をもち、沈線を2条めぐらす。把手には指の調整痕が明瞭に残る。内外面ともヨコナデを施す。36は土師質土器の皿である。口径7.6cm, 器高0.8cmを測る。底部は糸切り痕を残し、その後には板状圧痕をとどめる。体部内外面ともナデ調整である。造りは粗雑で全体に歪む。色調は明褐色で焼成良好。この一点は2号溝が埋った後



45



46



第11图 I区第1杭列出土瓦拓影图

に出来た自然流路内の粗砂層出土である。

37～42は2号溝の中でも堰状遺構からの出土で37～40は須恵器である。37は須恵器の杯蓋で復元口径13.1cm、現存高2.7cmで天井部を欠失する。天井部と体部の境に浅い沈線を施す。口縁部内面には浅い段を有し、古い形態をとどめる。38は高杯の脚部である。内面はカキ目状の調整を施す。39は平底の埴である。色調は黒褐色で胎土は精選され良好。全体に焼成時の歪みが著しい。底には窯印を有する。見込みには自然灰釉が付着する。40は壺と考えられる底部～胴部にかけての破片である。底部はヘラケズリでカキ目状の調整を施す。篋描の窯印をもつ。内面には灰釉がかかる。41は灰白色の平瓦である。焼成は悪く、全体の風化が著しい。42は裏面が剝離して厚さは不明。表面は細かい布目の跡を斜方向にヘラナデを行う。

43～46は第1杭列の周辺部より出土した遺物の一群である。43は土師器の皿で復元口径13.2cm、器高3.5cmを測る。全体に磨滅が著しく調整は不明。底部に板状圧痕をとどめ、見込みには吸炭処理を施す。平底に近い丸い底部から体部となり口縁部は少し外反する。44は平瓦の破片で焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。厚さ1.2cmである。表面は細かい布目痕、裏面は縄目の叩き痕を残す。45・46も平瓦である。側辺は篋切りで平滑に仕上げ表面は布目の後を篋ナデ、裏面は荒い縄目の叩きを有する。

3. 第2地点の調査

第2地点は第1地点の北約100mに位置し、南北40m、東西22m、面積880㎡の小範囲の調査区である。土層は耕作土の直下は鳥栖ローム層及び八女粘土層である。この調査区は台地の北辺にあたり、相当な遺構が存在している可能性もあったが、水田化の時の地下げや土取りの攪乱が著しく、深く掘り込まれた溝以外の遺構は存在しない。調査区は台地が南西部から北東部にかけて緩やかに傾斜して低くなり、比高差約1mを測る。

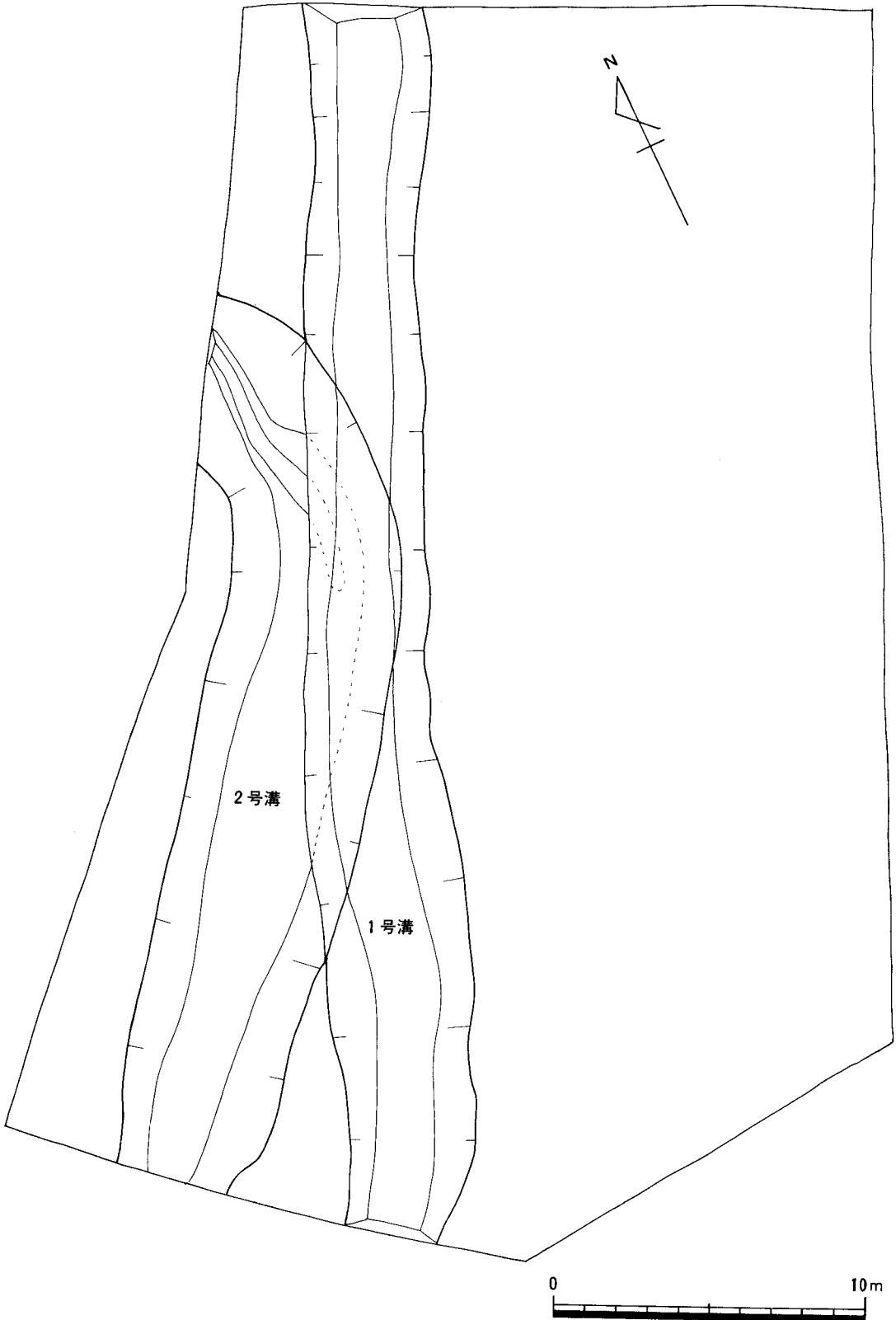
(1) 1号溝(第12図)

調査区の西側をほぼ直線的に南北に貫く溝である。幅3.5～4.7m、現存長40mを測る。断面の形態はU字状を示し、深さ約1.0～1.4mである。中央部で西側を北進する2号溝により切られている。溝の堆積は①～⑥層は茶褐色粘質土及び青灰色砂質土で、鳥栖ローム層が塊状に混入している。⑦～⑪は黄白色～暗灰色の粗砂層で、水の流れによる一時的な堆積をうかがわせる。北半部ではこの砂層の土面には鉄分の沈殿が著しく5～10cmの堅い層をなしていた。溝の床面の南北の比高差は約0.35mであり、南側の台地の高所部分より北流したものと考えられる。

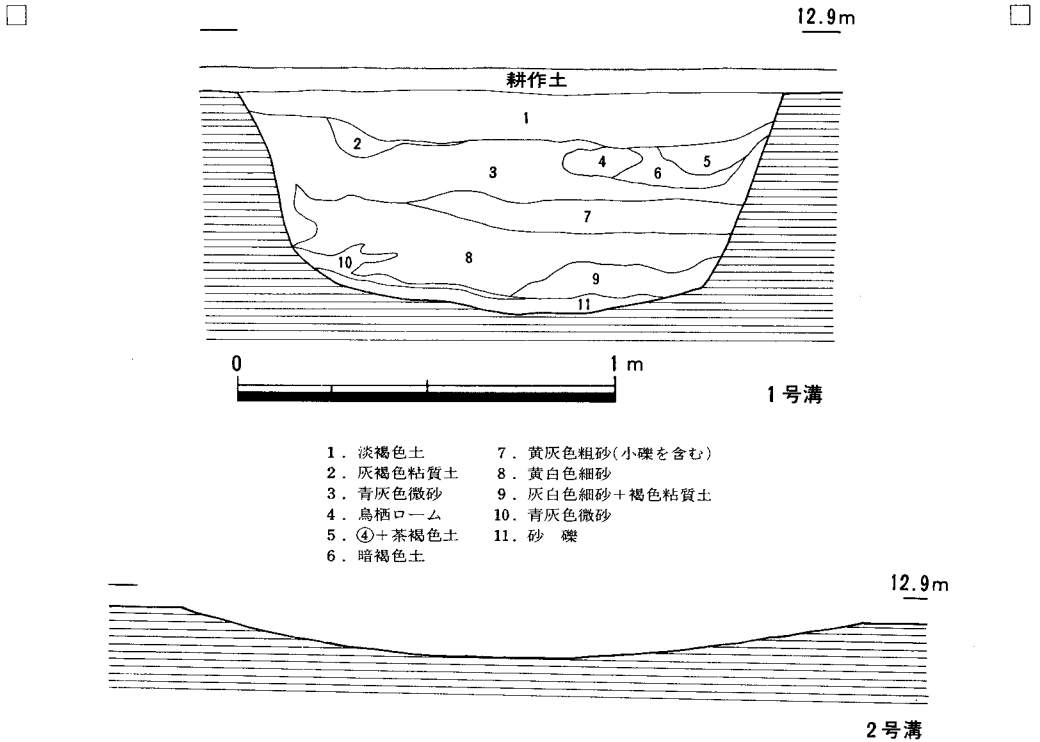
出土土器(第14図47～51)

1号溝からはほとんど出土遺物は無く、図示した須恵器数点である。47以外は溝の上層からの出土である。

47は杯の口縁部～体部にかけてのものである。受部には蓋の口縁部が貼りついており、焼成



第12图 II区1·2号沟实测图 (1/200)



第13図 II区1・2号溝土層図

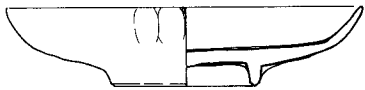
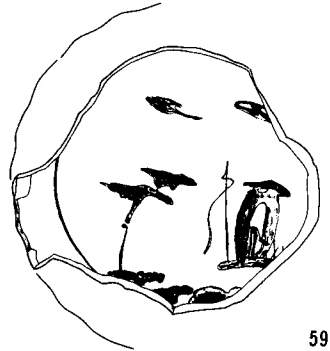
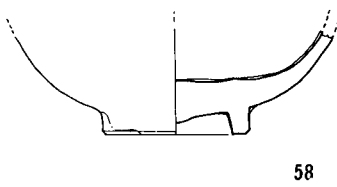
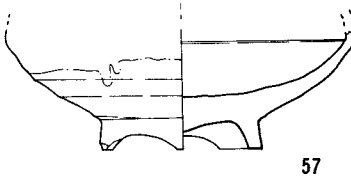
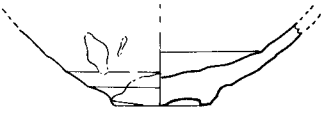
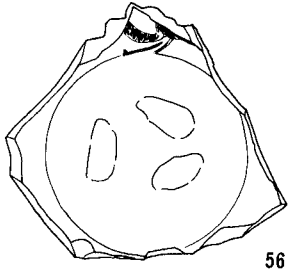
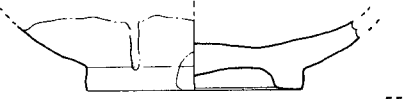
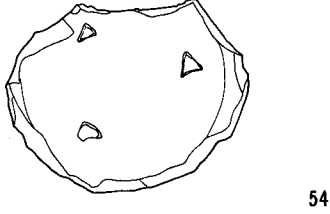
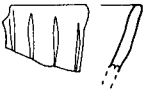
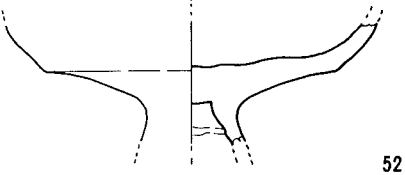
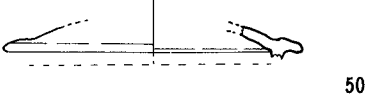
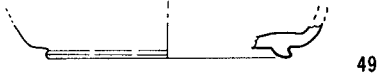
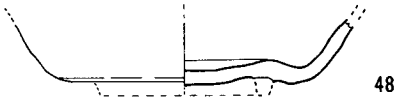
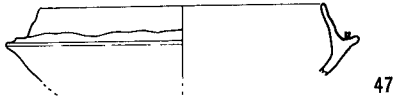
時に蓋で被った状態であったと考えられる。胎土、焼成は良く、青灰色を呈する。48は高台付碗と考えられるが、高台部が剥離している。高台部は中央部に寄っているが、全体に歪みがあるので本来もう少し外側につくものであろう。49も高台部の破片である。八の字状の低い高台に体部がつくものである。50は杯の蓋で口縁端部を欠失する。51は壺の口縁部で、頸部から直線的に外へ開く。胎土は砂粘を含まず、焼成良好。色調は青灰色を呈する。

(2) 2号溝 (第12図)

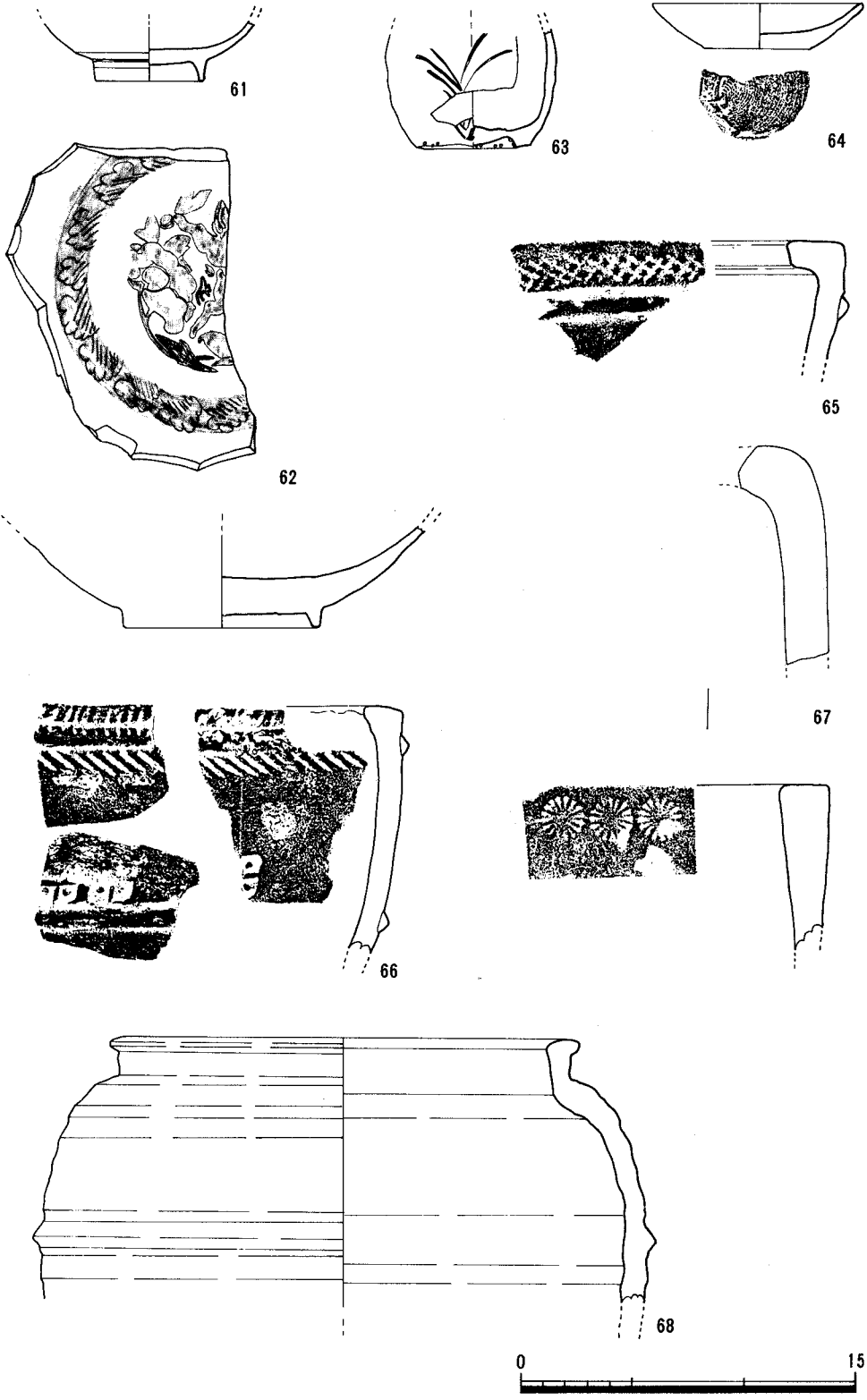
1号溝の西に位置し、一部重複している浅い溝である。南から少し東へ振れながら北進し、1号溝と重なる箇所でも西へ屈曲し、調査区外へ延びる。幅3.5~4.5m、現存長28mを測る。深さは南側で最も浅く20~25cm、北側にいくにしたがい深くなり約50cm程になる。断面は浅い皿状を呈し、肩部も不明瞭で溝と呼ぶより窪地的要素が強い。

出土陶磁器 (第14図53~15図68)

53~68は2号溝出土の陶磁器である。53は青磁で胎土は青灰色で、釉は深草色を呈する。体部には篋描の連弁を刻む中国製品である。58は青磁で高台から胴部にかけての破片である。胎土は青灰色で釉は緑灰色を呈する。全体に発色が悪く器表面は気泡が多く、平滑でない。壘付端部はヘラケズリされ、稜を有する。54~57は国内産の陶器である。54は底部から体部の破片



第14图 II区1·2号沟出土土器实测图



第15图 II区2号沟出土土器实测图

である。高台は低く、内面はヘラケズリである。高台の幅は0.3～6 cmである。内面には三角状の目跡が残る。胎土は灰白色で釉は緑灰色を施す。55は壙の底部から体部にかけての破片である。胴部下半～高台にかけてケズリを施し、見込にはロクロ痕をとどめる。胎土は灰白色で、釉は緑灰色を示し、外面の体部下半～高台部にかけては無施釉である。56は底部から胴部にかけての破片で、上半部を欠失する。小さい高台部には糸切り跡をとどめ、内面はケズリを施す。内側の見込には長楕円形の目跡が残る、黒褐色の染付を施す。胎土は青灰色で、釉は淡青灰色～灰白色で高台～胴部にかけて無施釉である。内面の底部と胴部には稜を有する。以上三点は唐津系の陶器である。57は胴部～底部にかけての破片で上半部を欠失する。外面の無施釉の胴部下半～高台にかけてはケズリを施す。高台は外に向って八の字状に開き、三ヶ所に抉入部を有する。内面は斑点状の緑褐色で、外側は同じく緑褐色の上に水色の釉を厚くかけ、垂下させている。64は底部糸切りの皿である。平底で杯部は直線的に開き、端部は丸味をもつ。無施釉で全体に淡褐色を示し、口縁部外面に幅0.7cm位で帯状に濃茶色を呈する。59～63は伊万里系の磁器である。59は低い高台に短い胴部がつく皿である。見込には円文の染付線の内側に山水文様を描く。染付は本来の姿から変化し写実性にとぼしい。草木、雲文、釣人と釣早を表現している。呉須は青紺色を用い全体の釉は濁白色を呈する。口唇端部には鉄釉をめぐらす。高台の畳付には砂目跡が残る。口縁部は輪花状に波状を描く。61は高台から体部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる碗片である。見込、高台際に染付に円文を描く。胎土は乳白色、釉は青味を帯びる。呉須は淡紺色を呈する。内面には目跡が残る。62は低い高台に外側に強く張る碗である。底部は厚いが、体部は薄くつくられている。見込みには波頭を現わす波状文を線刻し、その上に淡い紺色の呉須で円文を描く。その内側の中央部には牡丹と獅子を型押しする。釉は畳付部を除いた全体に施され、色調は青味を帯びた灰白色を呈する。63は瓶の胴部から底部にかけての破片である。胴部の対峙する所に草花を描く。呉須は発色が悪く緑色を帯びる紺色を呈する。全体の釉も灰白色を呈する。高台部及び底部には砂目が残る。65～67は瓦質の火鉢である。65は口縁部上面に平坦面を造り出し、口縁下2 cmに突帯をもち、口縁部との間に格子目の印刻をめぐらす。胎土には砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。66は器表面は黒褐色、内面は淡褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。外面の口縁下に突帯をもち、その上・下に櫛歯状の刺突文を羽状に配し、口縁部の突帯部まで及ぶ。胴部上半部にも三角突帯をめぐらし、田の字の印刻を施す。内面は横方向の刷毛調整を行う。67は胎土、焼成は66と同様であるが、外面に菊花文の印刻を施す四角い火鉢であろう。68は色調が茶褐色を呈する備前系の甕である。口縁部上面は平坦で、端部を丸くつくり出す。直立する短い頸部から肩が強く張り胴部となる。胴部中央部には三角突帯をめぐらす。内外面共に水引き痕を良くとどめる。

IV 小 結

今回の調査は2ヶ所に分れていたが、各々1,000m²前後で小範囲であるのに加えて、遺構が溝だけで、集落と直接結びつくものは検出されなかったため、言及することもおのずと限定されてくる。また出土遺構も少く、今回の調査を総括することも少いが、溝の時期、機能について、判明したことを述べる。

I区には溝が2本検出でき、1、2号溝として扱ってきたが、本来一連の溝と考えられる。土層の観察(第5図)でも新旧関係は認められない。また1号溝は2号溝と接する部分で終結するのも不自然で、2号溝に流れ込んでいたと解釈する方が妥当であろう。2号溝には小規模ではあるが堰状遺構が付設されていたり、その横に土壌を有するなど、単なる排水用とは考えられない。溝東岸の延長上には、川と直交する杭列も認められ、水の取り入れ口を想わせ、この溝は水田に利用される農業用水路としての機能を有すると考えられる。

1号溝からは出土遺物は極めて少いが、2号溝からは縄文時代から奈良・平安時代の頃の土器が出土している。縄文式土器は浅く幅広い凹線文を描き、胎土に滑石を混入する阿高系の土器である。図示した他に無文ではあるが滑石を胎土に混入するものが14点ある。近接する野多目粘渡遺跡で、同時期の貯蔵穴が50基検出されているので、現在の集落のある台地上にこの時期の集落が営まれていたと考えられる。弥生式土器は中期前半～後期前半のものが出土している。いずれも細片で磨耗が著しい。土師器は4～5世紀の小型丸底壺を初めとして、埴、手捏土器、壺などが知られる。胴部外面に線刻した甕もある。弧状の3本の沈線であるが、砂片が小さく何を描いているのか不明である。新しい時期のものでは板状圧痕を有する皿、底部糸切りの土師質土器もあるが、新しい時期の混入である。須恵器はI～IVまで各期のものがあるが、流れ込みと考えられる。瓦は布目瓦で外面に縄目、格子目の叩きを施す。以上の様にI区の溝からは縄文時代～室町時代までの遺物を含むが、少なくとも糸切りの土師質土器の皿③⑥の時期には埋っていたと考えられる。堰状遺構周辺から出土した瓦、須恵器が溝の年代を現わしているもので、奈良～平安頃と考えられる。

II区でも2条の溝を検出した。1号溝は幅3～4mで直線的に延び、掘り方も深く台地部であるので壁面の崩落も少い。主軸方位はN5°Eで条里の線とも合致し、条理の区割りの溝の可能性はある。出土遺物も奈良～平安時代にかけての所産で、時期的にも適合する。第2号溝は17～18世紀の頃のものである。63の伊万里の皿は17世紀の中頃に限定されるもので、61、62の唐津焼の皿は17世紀前半のものである。以上のように江戸時代中期の陶磁器類で長期間使用されたものである。溝は浅く意図的に掘り込んだと考えられるよりも、自然の丘陵部の谷部を利用したものと考えられる。用水路としての機能より、生活排水路として考えられる。字名が古屋敷と呼ばれているように、近くに17～18世紀頃の集落があったものであろう。

I区杭列計測表(野多目古屋敷)

No.	長さ×径	先端加工	No.	長さ×径	先端加工	No.	長さ×径	先端加工
第1 杭列			47	39×5.5		第2 杭列		
1	20.5×2	両削	48	39×5	両削・鈍端	1	44×4.8	両削
2	46.5×6.5	両削・鋭利	49	36×5.5	両削	2	46×4.3	両削・鋭利
3	43.5×5.2	"	50	29×4.5	両削・先端摩耗	3	47.5×4	"
4	47×5.8	先端摩耗不明	51	24×3.5	摩耗	4	34×5.5	両削
5	70×7.0	鈍端	52	46×6.5	鈍端・摩耗	5	37×4.8	"
6	87×6.0	鈍端・両削	53	34×5	両削	6	48×4.8	両削鋭利
7	40×6.5	"	54	46×5	不明	7	28×3.5	両削
8	64×5.5	"	55	27×4.8	両削	8	50×6	"
9	28×6	割材半円・先端不明	56	40×5	両削・鋭利	9	28×4	両削・鋭利
10	23.5×5	先端摩耗	57	73.5×6	"	10	44×5	"
11	29.5×6	片削・鈍端	58	102×6.3	先端割れ	11	37×4	片削・鈍利
12	40.5×6.5	片削・先端摩耗	59	33.5×5.5	両削	12	29×4	"
13	72×6.8	先端摩耗	60	87.5×8	両削・鋭利	13	42×5	両削・鋭利
14	61×5	"	61	84×6.3	両削	14	5×4	両削・鋭利
15	59×7	両削・先端摩耗	62	115×7.5	"	15	60×3.5	両削
16	81.5×7	両削・鋭利	63	105×8.0	"	16	17×3.5	"
17	98×5.3	"	64	107×7.5	"	第3 杭列		
18	82.5×5.8	両削鋭・先端摩耗	65	99×6.5	両削・鋭利	1	59×5.5	両削
19	48.5×7	両削	66	86.5×6.8	先端摩耗	2	(21×4)	摩耗
20	80×6.5	"	67	105×5.3	両削・先端摩耗	3	(20×2.4)	"
21	10×?	(乾燥のため形態変化)	68	71×5	両削・折損	4	55×6	両削・鋭
22	42×5.5	両削・鋭利	69	97.5×5.8	片削・鈍端	5	(48.5×3)	先端摩耗
23	32.5×3.8	不明	70	110×6.5	先端折損	6	(31×4)	摩耗
24	60×6.5	両削・鋭利	71	71.5×6	"	7	(42×4)	"
25	53×6.3	"	72	89×7.8	両削	8	()	"
26	82.5×6	割・両削・鋭利	73	105×8.0	両削・先端摩耗	9	欠	
27	80×4	両削	74	89+α×9	先端折損	10	欠	
28	47.5×6	先端摩耗	75	86×6.3	"	11	(37×4)	"
29	32×5.8	不明	76	91×6	両削	12	49×5	両削・鋭
30	66×7	両削	77	86.5×7	先端折損	13	32×4	両削?
31	95×6	片削・鋭利	78	113×6.5	両削・先端摩耗	14	30.5×4	不明
32	114×7	両削	79	115×5.5	両削	15	18.5×3.8	両削
33	105×7	"	80	120×7.0	両削・先端摩耗	16	18.5×3.5	不明
34	112.5×6	両削・鋭利	81	134×5.5	両削・鋭	17	50×5	両削
35	106.5×7	両削	82	49×5.3	"	18	43.5×2.8	"
36	108×8	片削・鈍端	83	82×6×6.5 心特割材(四角)	両削	19	57.5×6	両削・鋭利
37	79×6	鈍端	84	97×7.0	鈍端・片削	20	欠	
38	41×5	先端不明	85	88×4	先端折損	21	37×6	両削
39	37×4.5	両削	86	99.5×5.3	両削	22	13×3.5	摩耗
40	45×7.7	両削・鋭利	87			23	39×4	両削
41	52.5×6.5	両削	88	117×7 118×7.5	両削 "	24	54.5×7	"
42	20×4.5	"	89	105×7.8 割材(三角)	"	25	47×4.5	両削・鋭利
43	25.5×4	不明	90	98×5.8	"	26	37×4.8	両削
44	37.5×5.5	片削・鈍端	91	108×6.3	片削・先端摩耗			
45	37.5×5.5	両削・鈍端	92	103×7.5 心特割材	両削			
46	28.5×4	両削	93	75×6.8×5.5 割材	片削			

※杭の材質同定を鳴倉巳三郎先生に依頼する予定であったが、病气療養中のため依頼することができなかった。

圖 版



遺跡周辺航空写真



I 区 全 景

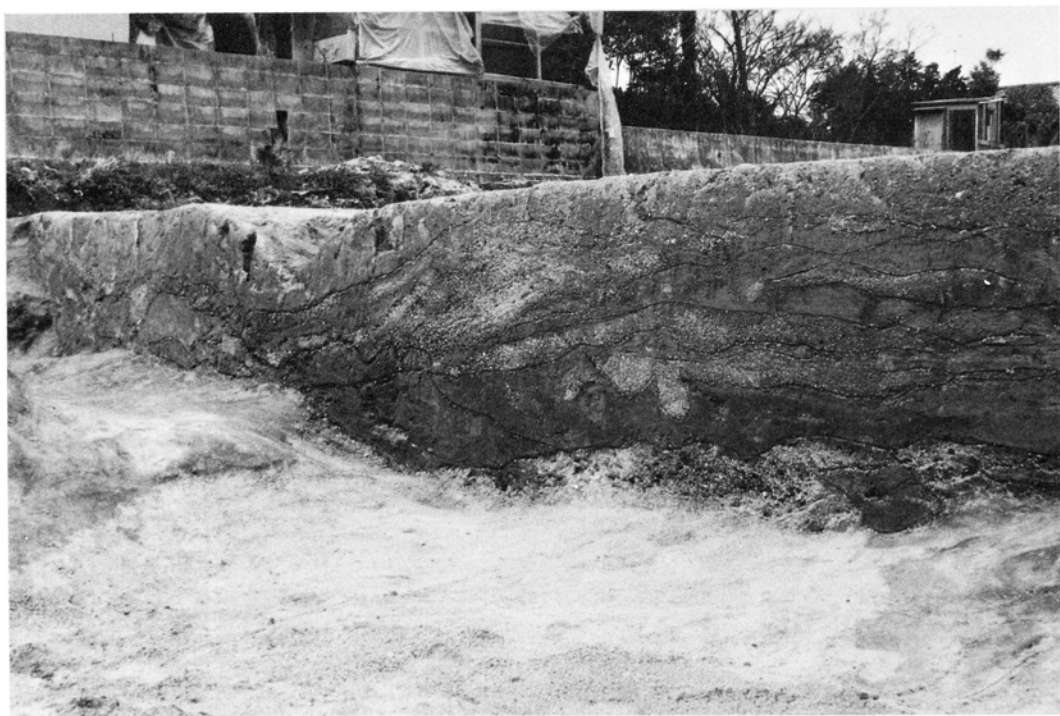


I 区 1 号 溝





I区1号溝全景（南より）



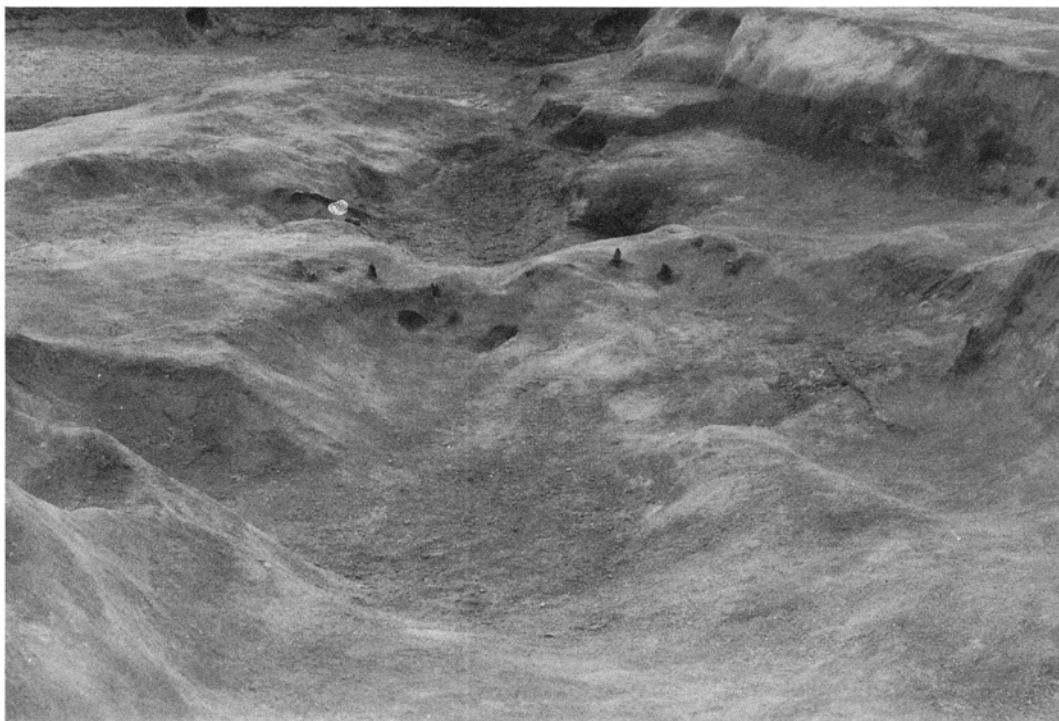
I区1・2号溝土層



I区1号溝土層



堰状遺構（東より）



堰状遺構（北より）



堰状遺構（北より）



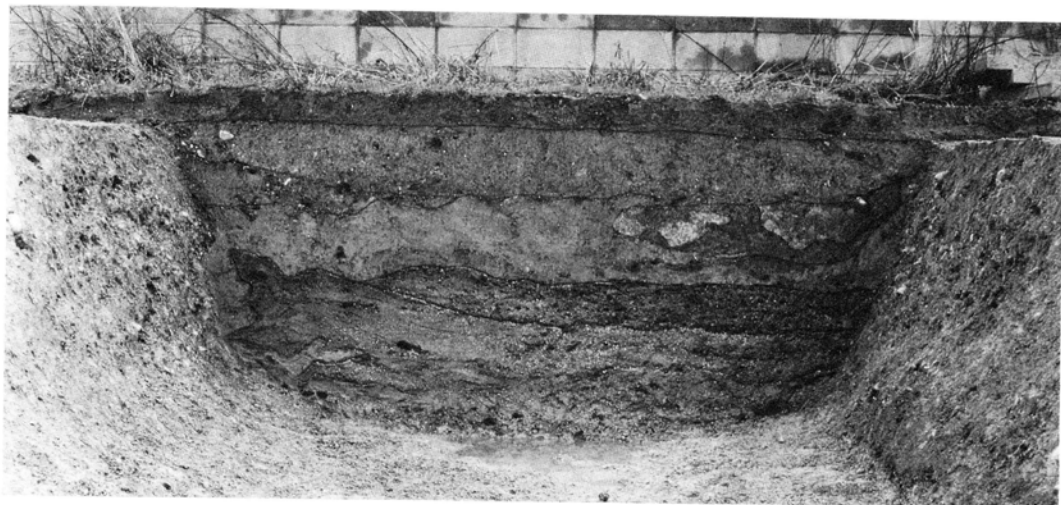
1号杭列（東より）



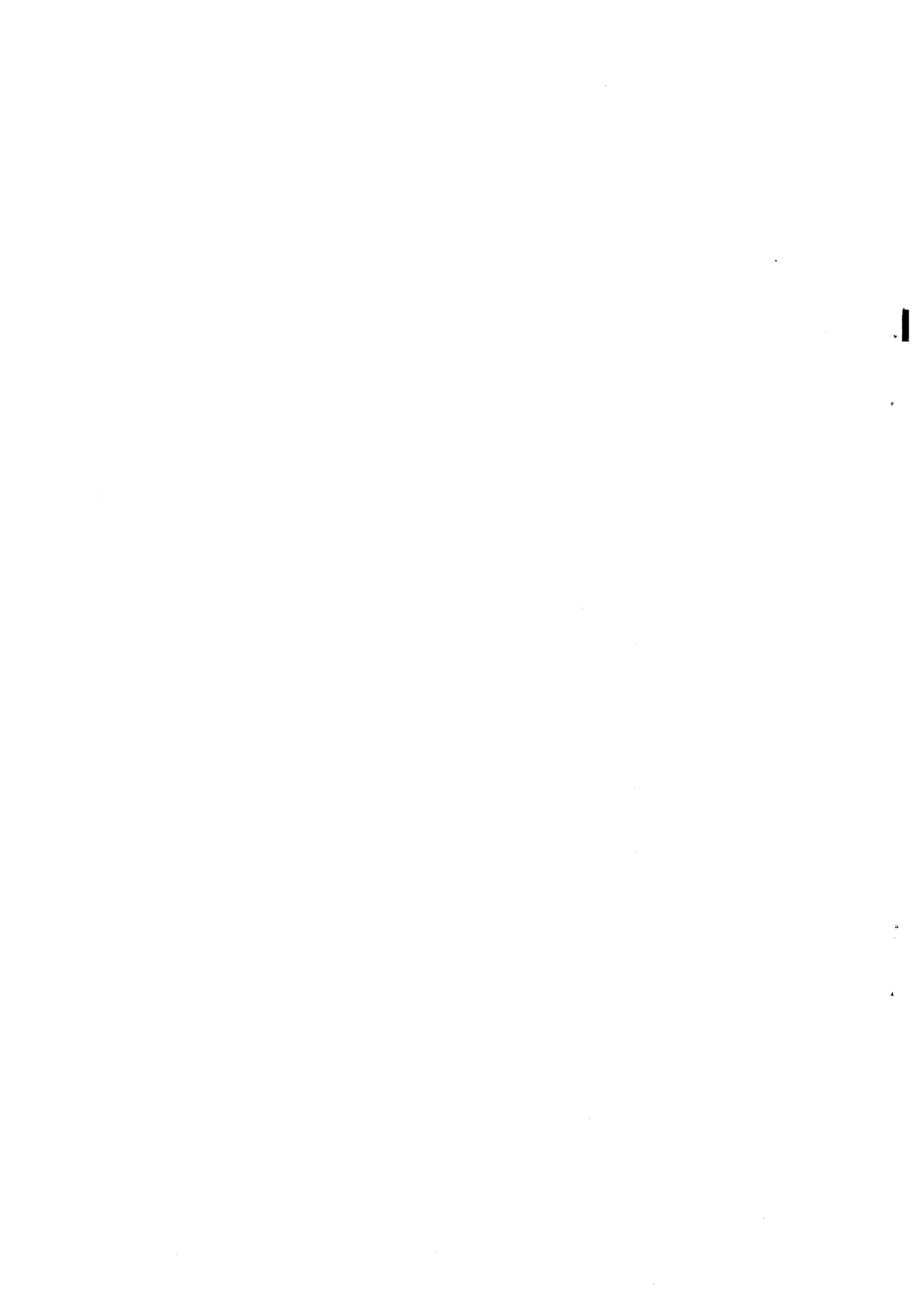
1号杭列（西より）

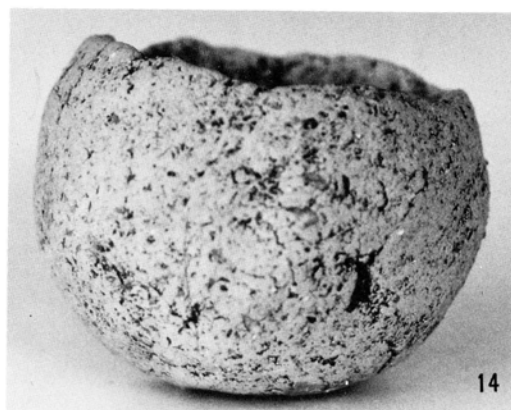
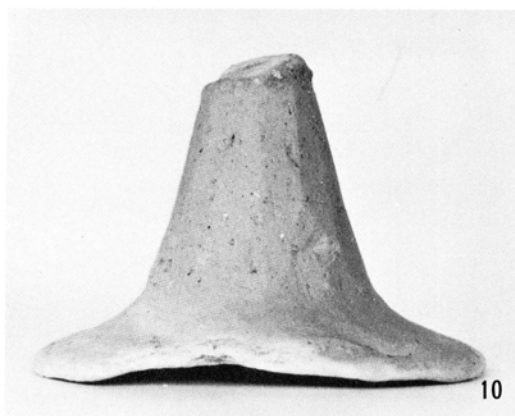
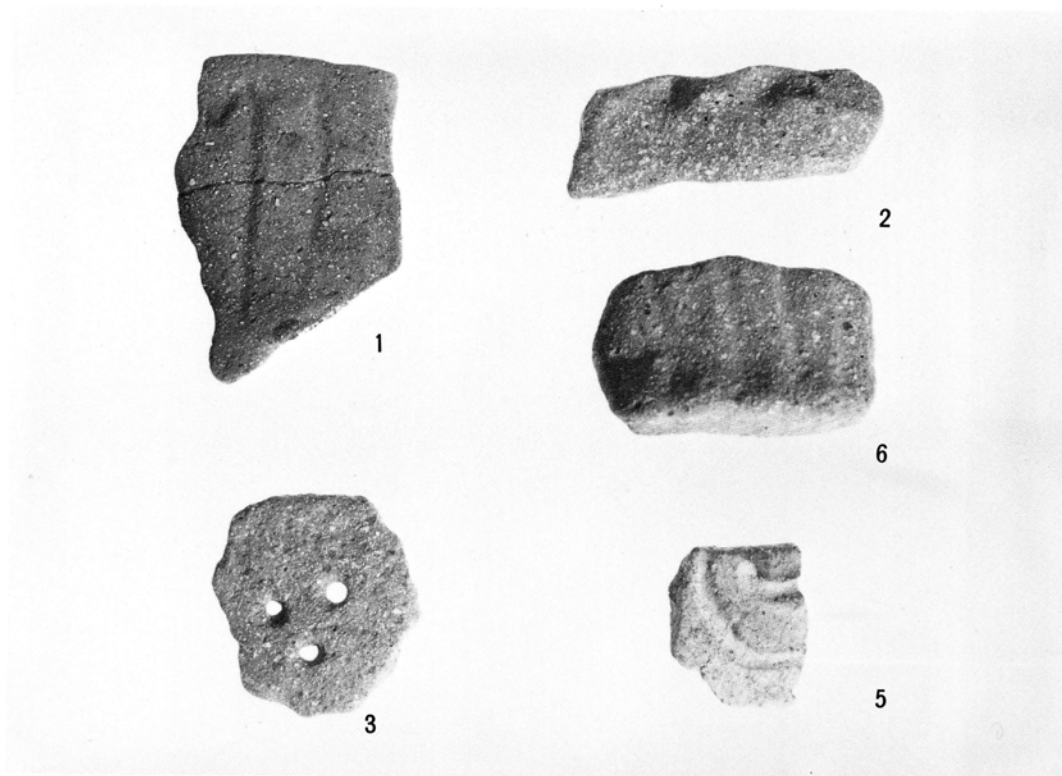


Ⅱ区1号溝(北より)



Ⅱ区1号溝土層

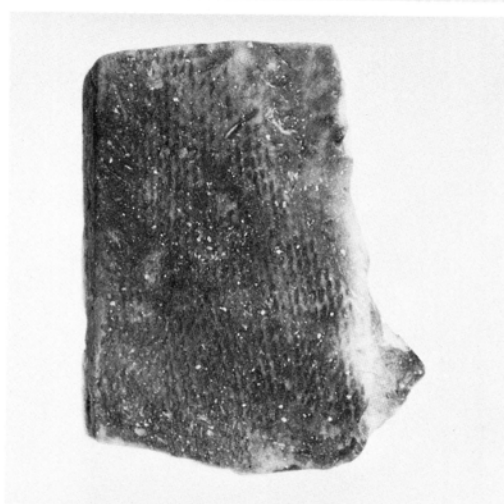
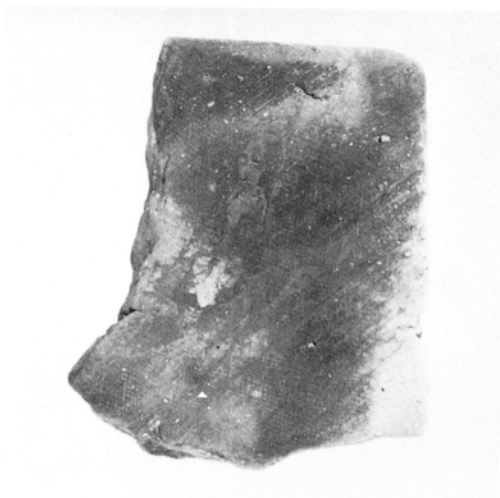
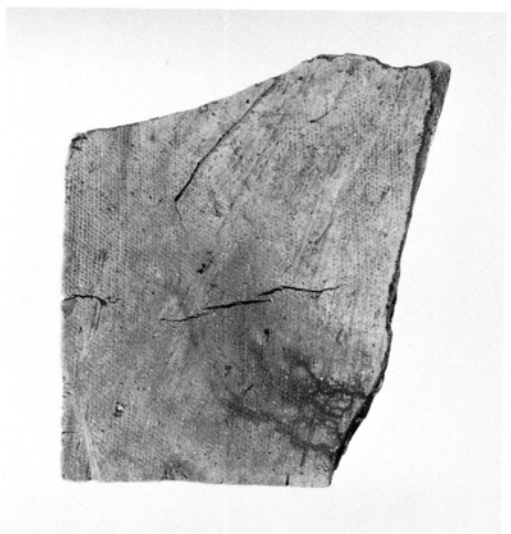
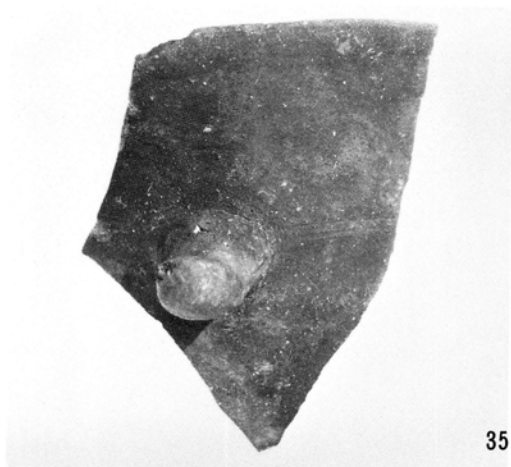




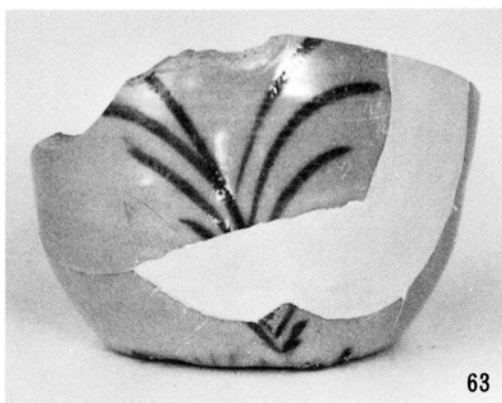
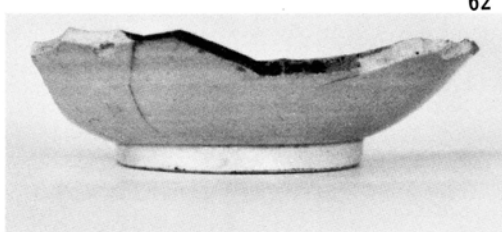
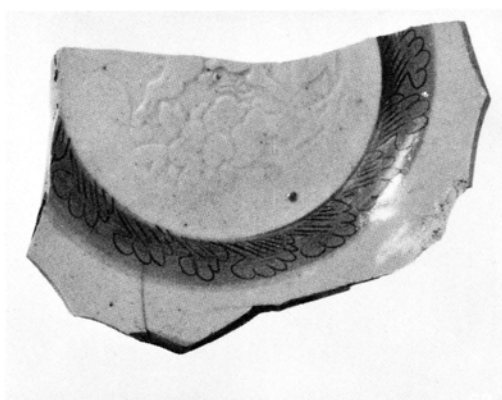
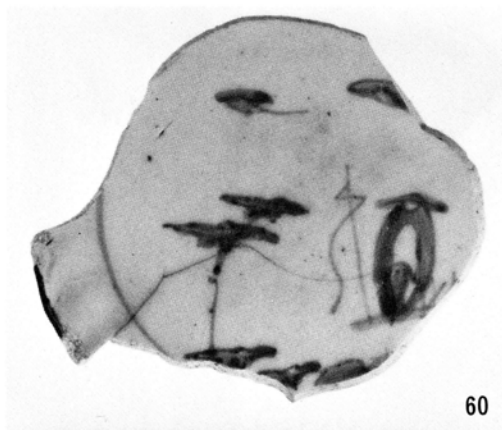
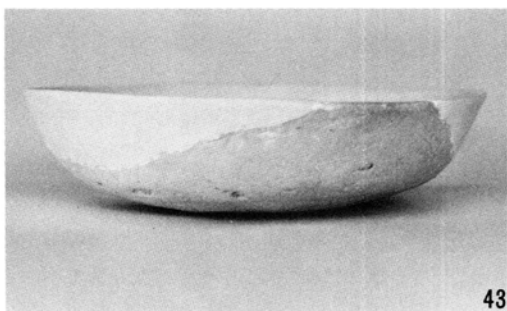
出土土器（縄文式土器 土師器）



出土土器（土師器 須恵器）



出土遺物 (須恵器 布目瓦)



出土陶磁器 (青磁 唐津 伊万里)



野多目古屋敷遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第103集

1984（昭和59）年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社西日本新聞印刷
福岡市中央区天神1丁目4番1号

